

す道がある。この山道は相馬から通じていた。そのころ相馬の若者たちは、伊達の状況を見て食糧不足を知って夜おそく三斗入の米俵をかついでやって来て、銭にかえて小遣いかせぎをする者があつた。自分の家の米俵が不足すると、よその米俵までかすめてそれをついでこの山道をせつせとやって来て、銭をかせいで帰るのだった。村の人達はこの道をいつとはなしに「盗人道」と呼ぶようになった。

そして、そのおかげで生命をつなぐ人達も多かつた。村びとたちはその道ばたに明神様をまつて、この道の旅行の安全と部落の繁栄を祈ることになった。今も岫や笹田の部落の人たちは、この明神様を氏神として毎年お祭をつづけている。この明神様のところを細い川が流れていて、明神様から上流には珍しい山椒魚がすんでいる。春夏秋冬、四季いろとりどりの自然の移り変わりと人生の歩みとを明神様は何百年もの間、じつと見つめながらこの川端に立っている。